

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第48集

立道遺跡

新東名 No. 4 地点

新東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

御殿場市-1

2015

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

立道遺跡は、世界遺産である富士山の東麓に位置する遺跡です。

新東名高速道路の御殿場ジャンクション以北の建設に伴い、当埋蔵文化財センターでは平成24年度より道路建設予定地内の埋蔵文化財の有無や規模を調査する試掘確認調査を実施しております。

立道遺跡は、この試掘確認調査により、その存在が初めて確認された遺跡です。立道遺跡周辺では、地形や地質的な制約等により、これまで遺跡の存在はほとんど知られていませんでした。

今回の調査地点では、江戸時代の宝永4（1707）年の富士山の爆発に伴う火山噴出物（宝永テフラ）が検出されております。その結果を受け、この宝永テフラに対する最新の技術・知見に基づく科学的分析を行い、本報告書にその成果を盛り込みました。静岡県における最大級の歴史的自然災害の痕跡にメスを入れ、考古学や歴史学のみならず、防災対策を考える上でのデータとして活用していただければ幸いです。

今回の調査では、居住活動の痕跡ではなく農耕と関連する遺構と考えられるものが検出されたことから、宝永噴火以前を主とする、宿場（茱萸沢宿）近郊の土地利用の様相を明らかにすることことができたと考えております。

本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助と御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2015年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

赤石達彦

例　　言

- 1 本書は、静岡県御殿場市茱萸沢字立道1081-9 外に所在する立道遺跡の平成25年度本調査と、新東名No.4地点の平成25年度試掘確認調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、新東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社東京支社の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 新東名No.4地点の試掘確認調査と、立道遺跡の本調査、資料整理の期間は以下のとおりである。
- 試掘確認調査　平成25年7月～8月　調査対象面積11,200m² 実掘面積426.6m²
- 本調査　平成26年1月～3月　実掘面積342m²
- 資料整理　平成26年10月～平成27年3月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
- 平成25年度
- 所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治
　主幹兼任事業係長 前田雅人 主幹兼総務係長 大坪淳子
　主幹兼調査第一係長 及川 司 第二係長 溝口彰啓 主査 岩本貴 主任 木崎道昭
- 平成26年度
- 所長 赤石達彦 次長兼総務課長 長谷川明子 調査課長 中鉢賢治
　主幹兼任事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 大坪淳子
　主幹兼調査係長 及川 司 主幹（東部地区グループ長） 溝口彰啓 主任 木崎道昭
- 5 本書の執筆は木崎道昭、藤根久（株式会社パレオ・ラボ）が行った。分担は以下のとおりである。
- 第1章～第4章 木崎道昭
　付編 藤根久
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 現地調査、資料整理、報告書刊行にかかり、実施した委託事業の委託先は以下の通りである。
- 平成25年度　掘削業務委託　セリザワ建設株式会社（試掘確認調査）
　測量業務委託　国際文化財株式会社（試掘確認調査、本調査）
平成26年度　整理作業業務委託　株式会社パソナ
　テフラ分析　株式会社パレオ・ラボ
- 8 発掘調査と整理作業では、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
- 足立順司 春日美海 勝俣竜哉（五十音順・敬称略）
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 立道遺跡本調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
(X = 38020, Y = -76910) = (0, A)
- 3 遺構図、遺物実測図等の縮尺は、図ごとに適当な縮尺を用い、それぞれにスケールを付した。
- 4 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修1992)を使用した。
- 5 基準土層名は、第2章第2節の本調査区西壁土層図(第5図)に表示した名称(ローマ数字を使用し、細分する層についてはアラビア数字の枝番を付ける)を用いる。なお、試掘確認調査のテストピットの土層については、各テストピットごとに異なるため、それぞれ名称を付し、アラビア数字で表記した。遺構覆土の土層は各遺構ごとに、①、②、③・・・で番号を付した。
- 6 下記の図については国土地理院発行地形図を複写し、加工・加筆した。
第1章第2節 立道遺跡位置図(第1図) 1 : 50,000地形図「御殿場」
第1章第3節 周辺の遺跡(第2図) 1 : 25,000地形図「御殿場」
- 7 付編「立道遺跡のテフラ層」の表・図版番号については、本書の他の表・図版とは別個に付け、独立した番号にした。
- 8 本文中や引用・参考文献の記載にあたっては、以下のように略した箇所もある
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
静岡県埋蔵文化財センター→県埋文センター
静岡県教育委員会→県教委
(各) 市・町教育委員会→(各) 市・町教委
- 9 写真図版4の個々の遺物のキャプションについては、19ページ第10図に掲載したものについては10-○と表記した。写真図版のみに掲載したものについては、①、②、③・・・と番号を付した。本文中の記載もこれによっている。

目 次

第1章 調査に至る経緯と遺跡の環境	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 自然的環境	2
第3節 歴史的環境	2
第2章 調査の概要	6
第1節 調査の方法と経過	6
第2節 土層	8
第3章 調査の成果	13
第1節 遺構	13
第2節 遺物	18
第4章 まとめ	20
引用・参考文献	21
付編 立道遺跡のテフラ層	22
写真図版	
抄録	

挿 図 目 次

第1章	
第1図 立道遺跡位置図	1
第2図 周辺の遺跡	3
第2章	
第3図 新東名No.4地点試掘確認調査テスト ピット・立道遺跡本調査区配置図	7
第4図 立道遺跡本調査区グリッド配置図	8
第5図 立道遺跡本調査区土層図	9
第6図 新東名No.4地点試掘確認調査土層図	11
第3章	
第7図 本調査区遺構全体図	13
第8図 個別遺構図①	15
第9図 個別遺構図②	17
第10図 出土遺物実測図	19
第4章	
第11図 宝永噴火の降砂量	20

挿表目次

第1表 遺構一覧表 18 第2表 遺物観察表 19

図版目次

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版 1 | 1 立道遺跡本調査区遠景
(南東より) | 図版 3 | 1 土坑S F 0 7 完掘状況 (北より)
2 土坑S F 0 8 完掘状況 (北東より)
3 溝状遺構S D 0 1 完掘状況
(南西より)
4 溝状遺構S D 0 3 完掘状況
(南東より)
5 溝状遺構S D 0 3 土層断面
(東より)
6 小穴S P 0 1 完掘状況 (東より)
7 本調査区西壁土層断面①
8 本調査区西壁土層断面② |
| 図版 2 | 2 本調査区完掘状況 | 図版 4 | 1 試掘確認調査出土土器・陶磁器
(外面)
2 試掘確認調査出土土器・陶磁器
(内面)
3 本調査出土土器・陶器
4 本調査出土の瓶
5 本調査出土の瓶 (底部) |
| | 1 土坑S F 0 1 完掘状況 (北西より)
2 土坑S F 0 2 完掘状況 (東より)
3 土坑S F 0 2 覆土土層断面
(東より)
4 土坑S F 0 3 完掘状況 (北より)
5 土坑S F 0 4 完掘状況 (北より)
6 土坑S F 0 5 完掘状況 (南より)
7 土坑S F 0 5・溝状遺構S D 0 1
土層断面 (南西より)
8 土坑S F 0 6 完掘状況 (東より) | | |

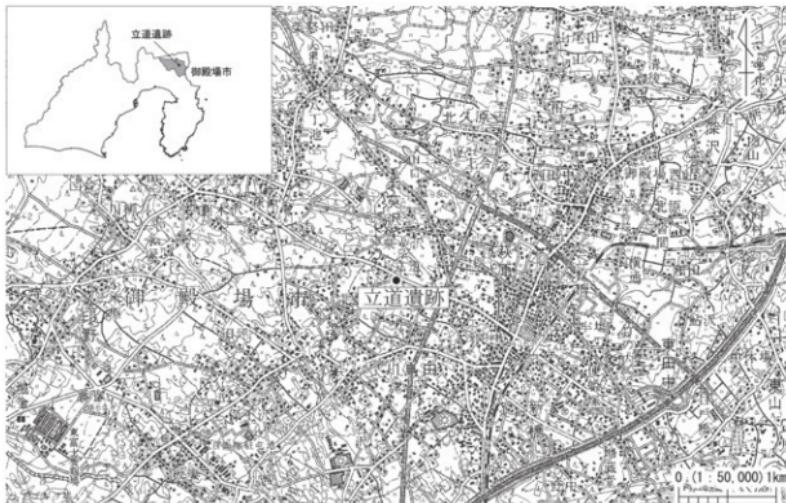
第1章 調査に至る経緯と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯

新東名高速道路は神奈川県海老名市から静岡県を経由して愛知県豊田市に至る高速道路である。1993年から長泉沼津インターチェンジ（以下ICと略）と豊田東ジャンクション（以下JCTと略）間で、1998年からは、御殿場JCTと長泉沼津ICの間で、それぞれ工事がスタートし、2012年4月14日に御殿場JCTと浜松いなさJCT間が開通する運びになった。御殿場JCT以東については、1998年に秦野ICまでの区間の整備計画が策定され、2006年から工事が開始された。

これらを受ける形で、御殿場JCT以東、県境までの御殿場市、駿東郡小山町地区の埋蔵文化財の取扱が課題となり、2007（平成19）年7月26日付けで、中日本高速道路株式会社東京支社沼津工事事務所から静岡県教育委員会（以下、県教委と表記）へ埋蔵文化財包蔵地等に関する照会がなされた。これに対する県教委は、御殿場市教育委員会と小山町教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無について照会を行い、その結果に基づいて、御殿場市域7箇所、小山町域2箇所の調査箇所を選定した。

これを受け、2012（平成24）年9月27日付けで、中日本高速道路株式会社東京支社沼津工事事務所と県教委の間で、「新東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」が締結され、静岡県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センターと表記）が発掘調査等の業務を行うことを取り決めた。協議の上、県埋文センターは調査に関する準備を進め、平成24年度には御殿場市のNo.1地点（神山）及びNo.3地点（杉名沢）の、平成25年度には御殿場市のNo.4地点及びNo.5地点（共に茱萸沢）の試掘確認調査を行った。その結果に基づき平成26年1月からNo.4地点の立道遺跡の本調査に着手した。



第1図 立道遺跡位置図

第2節 自然的環境

立道遺跡は、富士山東麓の裾野に位置する。標高は491m程度であり、山麓斜面の末端近くに所在する。遺跡の立地する地域は、約2900年前に発生した御殿場岩屑なだれによる堆積物に覆われている部分が大半を占める。標高約500m以下の地域では、この御殿場岩屑なだれ堆積物に後続する時期に堆積した、御殿場泥流堆積物に覆われている。

富士山は、その形成期から最近に至るまで、多くの噴火を行い、種々の自然災害をもたらしてきた。紙幅の関係で大半を省略するが、本遺跡に関わる時代で最も重要なのは、平安時代～近世に起こった噴火である。特に800（延暦19）年、864（貞觀6）年の2度の大噴火のほかに数多い小規模噴火が起こった平安時代と、18世紀初頭の1707（宝永4）年の宝永噴火は重要である。1707年には太平洋側に最大級の被害をもたらした宝永地震（噴火の49日前）が起き、現在の静岡県域にも多くの被害が出たが、宝永噴火との関連が注目される。このほか、戦国期にも小噴火があった（1511年、1560年）（註1）。

第3節 歴史的環境

立道遺跡周辺には弥生時代から近世・近代に至る遺跡が存在するが、地質的、地形的な条件もあり、遺跡の分布密度は必ずしも高くはない（第2図）。

本遺跡（1）（ここでは新東名No.4地点（2）を含む）の近隣には、北に中尾遺跡（4）、内新田遺跡（5）、アラク遺跡（3）が比較的至近の距離で存在する。中尾遺跡は既に大正時代に遺物が採集されているが、調査は行われていない。土師器の环と壺が出土している（御殿場市 1982）。6世紀後半～7世紀のものと思われ、やや長期間の土器が混在しているようである。内新田遺跡については奈良・平安時代の土器が採集されているが詳細不明である。アラク遺跡は新東名建設に伴う試掘確認調査で県埋文センターにより発見された遺跡である（新東名No.5地点）。平成25年10月に試掘・確認調査が行われ、土坑・溝状遺構が検出された。その結果を受け、平成26年6～9月に本調査が行われた。本調査の結果、長大な形状を持つを主とする土坑31基、溝状遺構2基、ピット2基が検出された。長大な土坑は、今回報告する立道遺跡のS F 0 1～0 4と類似し、その関連性が注目される。アラク遺跡については、平成27年度本報告書刊行予定である。

立道遺跡の西に馬見塚遺跡（8）が存在する。弥生時代の甕型土器の脚部等が発見されたとされるが、遺物の所在は不明である（御殿場市 1982）。1991年に御殿場市教育委員会により、広範囲にわたる確認調査が行われた（御殿場市教委 1991）。その報告によれば、ピット群、いわゆる「イモ穴」状の土坑のほか、石組遺構が検出されている。ただし石組遺構にはガラス片が伴っていたため、近代以降の森永乳業の施設関連と報告者は推定している。それ以外の遺物は全く出土せず、遺構等の年代も不明としている。しかし、石組遺構以外の遺構は、宝永テフラより下部で検出されており、恐らくは17世紀以前の遺構である。石組遺構を除けば、今回報告する立道遺跡に類似した内容で、留意される。

本遺跡の北西側、現御殿場西高校の箇所には下込野内遺跡がある（6）。御殿場西高校造成中に台付甕が出土した（御殿場市 1982）。完形に復元できる個体であり、内外面共に全面ハケメが施されており、市史では土師器としている。この下込野内遺跡よりさらに西北の地点に下原遺跡がある（7）。堅穴建物らしき落ち込みが見つかったと市史には記されている。口縁部の土器破片1点の実測図が市史に掲載されている。



第2図 周辺の遺跡

さらに立道遺跡より東側に目を転じれば、平坦地部分に萩原経塚（37）があった。経塚は遺構・遺物とも現存していないが、1884（明治17）年に塚を発掘した時の記録（作成は1891（明治24）年）が存在し、細部について知ることができる（御殿場市 1982）。字「経塚原六角堂」の畠中に塚があり、そこから「石財數拾個」とともに「黄金之筒」（青銅製經筒）1個が発見された。筒には4行の銘文があり、「十羅利女／奉納大乘妙典六十六部／三十番神／享禄三午令日吉日」とあった（註2）。これは、享禄3（1530）年に製作された、六十六部廻國經筒（足立 1997）である。

この経塚の北東に御殿場小学校遺跡（30）がある。ここでは鮎沢川の河床より、鎌倉・室町時代に流通した銭貨が多数出土したという（御殿場市 1982）（註3）。

JR御殿場駅東方には古くから調査が行われてきた、中田遺跡がある（28）。さらにその南側に隣接して松ノ木田遺跡（27）が存在する。遺跡の時期も内容も一致する点が多く、同一遺跡であろう。平成25年度までに、中田遺跡では第VI次まで、松ノ木田遺跡ではIII次までの調査が行われている。遺構は中田遺跡では、竪穴建物16・掘立柱建物5・円形土坑・溝状遺構・不明遺構等が検出されている。松ノ木田遺跡では竪穴建物1・掘立柱建物2・土坑23・溝状遺構3・ピットが検出されている（御殿場市 1982）（御殿場市教委 2001）（御殿場市教委 2010）（御殿場市教委 2014）。両遺跡とも、調査は遺跡全体に対して部分的なもので、まだ多数の遺構が存在すると推定される。数十基以上の竪穴建物と掘立柱建物、及びその他の遺構からなる集落遺跡であろう。時代は古墳時代後期から平安時代までかかり、後で述べる永原追分遺跡群と共に、古代の御殿場市を考える上での重要遺跡である。土師器や須恵器のほかに、灰釉陶器、紡錘車も出土している。

中田遺跡の周辺は、古代において、当地域の中心的な地域であったと考えられ、遺跡の密度が高い。備宜地遺跡（29）・長瀬遺跡（26）・日垣田遺跡（25）・稻谷遺跡（24）・（川島田）稲谷遺跡（39）（註4）があり、南側の永原追分遺跡群に連なる。永原追分遺跡群の東にもヒガキ田遺跡（20）・大塚越遺跡（19）が存在する。大半が古代の遺跡であり、恐らくは中田遺跡から間断なく連続する、古代の遺跡群と捉えるのが妥当であろう。また、これらの遺跡群の東側は遺跡の空白地であり、ここに史料上の「大沼」が存在する。大沼が古代の遺跡である。また、これらの遺跡群の東側は遺跡の空白地であり、ここに史料上の「大沼」があり、遺跡群は「大沼」の沿岸集落であろう。ヒガキ田遺跡から有孔石製品が発見されているのが注目される。

永原追分A遺跡（22）・B遺跡（21）・C遺跡（23）は、前述の中田・松ノ木田遺跡とならんで、調査が進展している遺跡群である。A遺跡・B遺跡は1976年に調査が行われた。A遺跡からは、竪穴建物1・掘立柱建物1・円形土坑22・溝状遺構3・土坑状遺構1・小ピット群が、B遺跡からは、掘立柱建物1・溝状遺構1・根株状遺構1が、それぞれ検出されたが、御殿場南中学校敷地を中心とした一つながりの遺跡であろう。遺物は、土器・灰釉陶器のほかに中国銭貨5・石玉1が出土している。土器には墨書き器が含まれる（御殿場市教委 1977）。

永原追分C遺跡はそこからやや離れた北西側に位置し、1996年に調査が行われ、竪穴建物3・掘立柱建物3・土坑及びピット98・溝状遺構3・不明遺構1が検出された。遺物は、土器・灰釉陶器のほかに綠釉陶器が出土し、土鍤・鉄製品も発見されている（御殿場市教委 2000）。土器等から判断するに、A・B遺跡は10世紀を中心とする。C遺跡においては、9世紀初頭ないしは8世紀後半から集落が営まれた可能性も指摘されている。なお、永原追分A・B遺跡の出土遺物については、再調査がおこなわれており、その成果によるならば、「貿易陶磁や瀬戸・常滑の中世陶器が出土していたことが確認された」とのことである（勝俣 2005）。

永原追分遺跡群の南方には、御殿場線西側に浄本田遺跡（15）、東名高速南側には、大沢原古墳群・大沢原十字路遺跡（16）とその南に大沢原南遺跡（38）、東側に堀上遺跡（18）、高速道路に接して大沢原遺跡（17）がある、浄本田遺跡からは土師器・須恵器の坏が、大沢原南遺跡からは須恵器破片が、大

沢原十字路遺跡からは、完形に近い土師器甕が発見されている。堀上遺跡からは近世以降と思われる内面漆塗りの壺が出土している（御殿場市 1982）。

大沢原古墳群は、玄武岩で構築された横穴式石室が現存・開口している古墳1基（（御殿場市 1982）の1号墳）のほかに、古墳と考えられる塚が3か所現存しており（同じく2～4号墳）、古墳後期の群集墳と考えられている。1号墳は未発掘で詳細不明であるが、駿河地域に多く見られる無袖式石室と考えられる。

立道遺跡の南方は、現状では遺跡の空白地帯となっているが、更に南方には、黄瀬川沿いに杉名沢道遺跡（13）、竈古墳（14）及び寺ノ上遺跡（12）があり、富士山の裾野部では俎遺跡（10）と北原遺跡（11）がそれまとまって分布している。杉名沢道遺跡は、開発の際に大量の土器が出土したとのことであるが、公表されているのは、「市史」に見える2点の土師器甕の破片のみである。8世紀の小型甕の可能性が高い。竈古墳については、未調査で詳細不明であるが、「静岡県文化財地名表I」（静岡県教委 1988）によれば、円墳で、保存状態良好とのことである。寺ノ上遺跡は古墳時代の集落遺跡とされている。俎遺跡からは、土師器の壺と甕が出土し、堅穴建物の存在が推定されている（御殿場市 1982）。ほぼ完形の土師器甕が図化されているが、類例に乏しい器形である。古墳時代前期～中期のものか。北原遺跡では大正末ごろに鉄製錫杖頭、硯、人骨が出土したという（御殿場市 1982）。このうち錫杖頭は現存し、図化されている。

最後に、立道遺跡の北東側、遺跡の空白地帯を挟んだ地域を見ていく。北久原～塙原地区にやまとまつた遺跡の分布がある。角左衛門屋敷（32）・ミイナ畑（33）・山郷神社（34）・一本木（35）・山尾田（36）等の諸遺跡である。大半の遺跡が弥生時代の散布地とされているが、調査が行われておらず、詳細は不明である（静岡県教委 1988）。このうち、山郷神社遺跡とミイナ畑遺跡の出土土器は公表されている（御殿場市 1982）。

註

- (1) 神奈川県山北町河村城跡では、豊臣軍による同城の落城（1590年）後に堀切が埋められた後、宝永噴火までの期間に堆積されたとされるスコリア層が検出されたとされており、「富士一河村城スコリアFj-Kw」と仮称され、富士火山一帯の噴出物であることが想定されている（上杉・砂田 2008）。この期間の富士山及びその付近の山の噴火の文献上の記録は存在せず、噴火があったか否か不明である。なお、今回の調査では、これに比定されるようなスコリア層は検出できなかった。
- (2)（御殿場市 1982）では、銘文は1行目「十羅利女」、4行目「享錄三年午令日吉日」と、明治24年の記録そのものを復刻していると思われる。1行目の「利」は「利」の誤りであり、記録の誤りであろうか。後者については、「市史」では「午」を年の干支ととり、享禄三年は、庚寅年であるから合わないとしている。しかし、「享錄三年午令日」は享禄三年中の午の令日と取れば問題はない。「享錄三年」も、原史料は「享禄」だった可能性がある。
- (3)御殿場小学校遺跡の至近の位置に、古くから、「二枚橋古墳」と称され、前方後円墳とされていた丘がある（31）。現在まで発掘調査されたわけではなく、確実なことは言えないが、泥流堆積物等による丘とする見解（（御殿場市 1982）・（静岡県教委 2001））が妥当と考えられるので、ここでは遺跡としてとりあげなかった。
- (4)「静岡県地理情報システム」内のレイヤ「埋蔵文化財遺跡範囲」（静岡県教育委員会）では、この（川島田）稻谷遺跡（39）について記載がなく、稻谷遺跡として別地点があげられている。しかし、24の稻谷遺跡は古墳時代の土器が出土したとされており、中世遺跡の（川島田）稻谷遺跡とは異なっている。よって、ここでは別遺跡ととらえた。なお、（川島田）稻谷遺跡からは、半完形の常滑壺が出土しており、写真と実測図が公表されている（御殿場市 1982）。

第2章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

1 試掘確認調査

平成25年度の試掘確認調査は、既に用地買収の終わった箇所に17箇所のテストピット（以下TPと略）を設定し、7～8月に行った（第3図）。5メートル四方の範囲で表土ないし旧耕作土を重機で除去し、更にTP中央に3メートル四方の調査区を設けて人力で掘削を進め、遺構確認面の可能性のある層の変わり目ごとに遺構確認を行なながら、調査を行った。ただし、TP09は遺構が検出されたため二段掘りを行っていない。また、TP15は表土ないし耕作土と思われる土層が深く、湧水が顕著なため、二段目の掘削は行わなかった。

試掘確認調査の結果、TP03、08～13から遺物が出土した。遺物は、第3章で本調査出土のものと合わせて記述するが、灰釉陶器ないし山茶碗の破片1点以外は、近世陶磁器、土師器の小片のみであった。

遺構は、TP04、09、14から検出された。TP04からは小規模な長方形土坑が、TP14からは小穴が1基検出された。TP09からは大型の円形土坑が2基発見された。何れの遺構も試掘確認調査の期間内に土層等の記録を取りながら完掘した。遺構は全て本章第2節で記述するIV層相当層上面で検出されており、本調査で検出された遺構と同様であった。個別の遺構についての記述は、本調査検出の遺構と一括して第3章で行う。

2 本調査

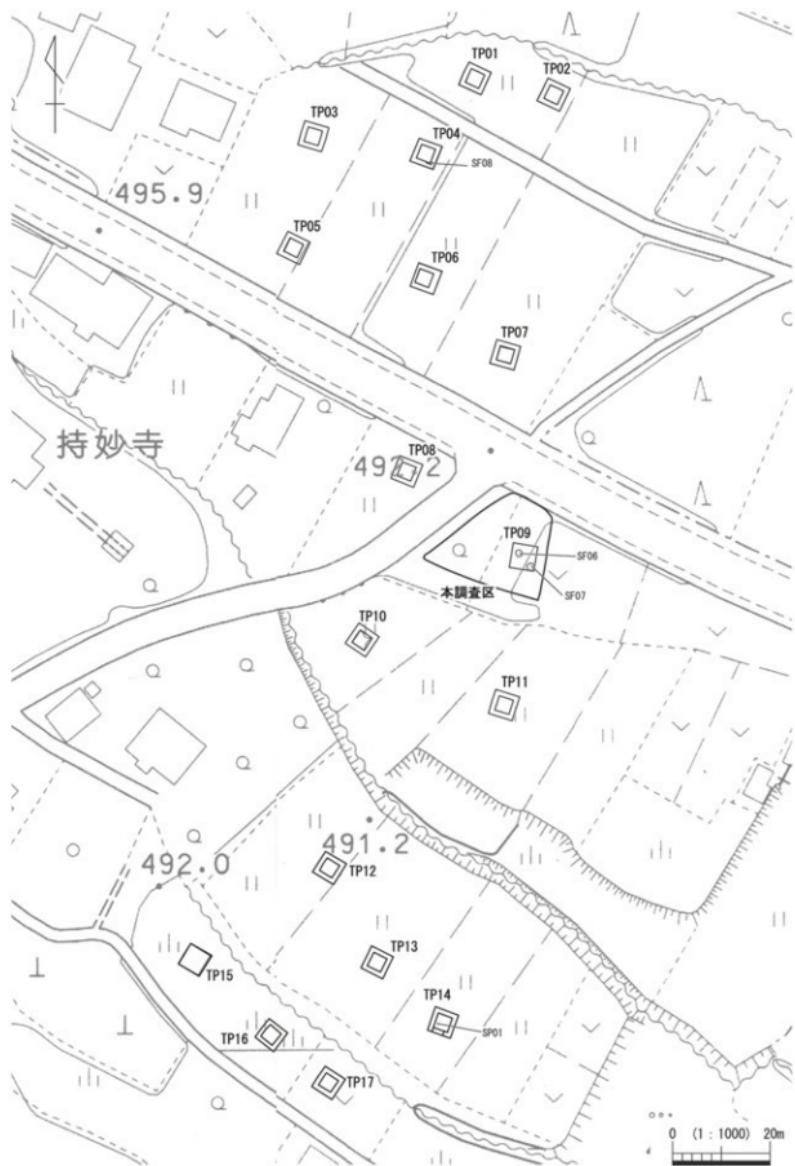
前述のとおり、試掘確認調査の結果、遺構・遺物が検出され、遺跡であることが確認された。No.4地点は、新東名高速道路建設に伴って破壊されるのは明らかなるため、遺構が検出されることが予想される箇所に面的な本調査を行うことが必要であると考えられた。静岡県埋蔵文化財センター、静岡県教育委員会文化財保護課、中日本高速道路株式会社東京支社沼津工事事務所で協議を行い、本調査の範囲と調査期間等を決定した。また、この後に本調査範囲が立道遺跡と命名され、県の台帳に登録された。

本調査の調査区は、試掘確認調査で遺構・遺物が検出され、更に遺構の拡がりが予想されるTP09を中心に、その周囲に設定した。当初の設計では350m²の調査区であった。

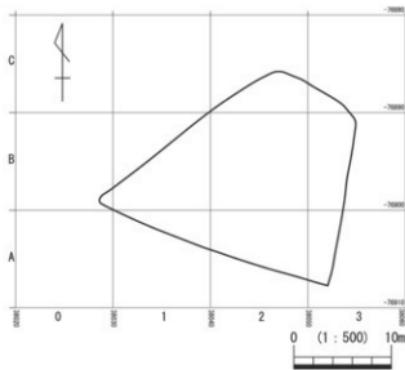
調査にあたっては、平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系の軸線を基準に、10m×10mのグリッドを設定した。グリッドには南から北へアルファベット、西から東へアラビア数字を付した（第4図）。

I層（盛土及び旧表土）とII層（宝永テフラ層と想定）を重機で掘削し、遺物包含層としたIII層を人力で掘削した。III層下面（IV層上面）で遺構確認と遺構検出を行った（土層については本章2節を参照）。遺物については、包含層から出土した遺物（2点のみ）は出土点を計測しながら取り上げた。なお、重機で除去したI層からも遺物の可能性のあるものの採取に努めた。遺構図面の作成は国際文化財株式会社に委託して、空中写真測量を主にして実施した。遺構等の写真撮影は、6×7の中判カメラを主に使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。また、35mmカメラとデジタルカメラを補助的に使用した。

本調査は、平成26年1月20日に、重機による盛土等除去により開始した。1月27日から人力掘削を行った。2月13日から遺構検出と遺構掘削を開始した。3月6日に空中写真撮影と写真測量を行い、埋め戻



第3図 新東名No.4地点試掘確認調査テストピット・立道遺跡本調査区配置図



第4図 立道遺跡本調査区グリッド配置図

託し、10月後半から整理・報告書作成作業を開始した。遺構図面は、現地測量業務を委託した国際文化財株式会社の写真測量のデジタルデータを原図として用いた。遺構図・遺物図の編集、版組、トレースはAdobe Illustrator CS 3により行った。

11月21日に遺物写真撮影を実施した。中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。

宝永テフラの同定を行うため、II層を中心とした土壤サンプルを調査中に現地で採取したが、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した（その結果については本書付録を参照）。

第2節 土層

今回の報告では、試掘確認調査（新東名No.4地点）と、立道遺跡本調査部分の土層について分けて記述する。前述のとおり、試掘確認調査のT Pはかなり広範囲に設定されており、本調査区の土層と異なる箇所も多い。

1 本調査区の土層（第5図）（図版3-7・8）

以下のとおり、基準土層を設定した。I層を盛土及び耕作土、II層を宝永テフラ層、III層は黒色を呈する包含層、IV層を地山層に比定し、IV層以外は各々を細分した。

I-1層：盛土である。調査区のうち、近年まで住宅のあった西側の一段高くなった地域で、特に顕著に見られる。ガラス・プラスチック片等が混在し、礫がかなり多量に含まれている。住宅建設に伴う敷地造成のための盛土であろう。

I-2層：旧表土（耕作土）層と考えられる層。黒褐色土。7.5YR3/1粘性なし。締まり弱い。調査区西端部及び北東部では大半が失われている。住宅建設のための宅地造成で削平された可能性がある。

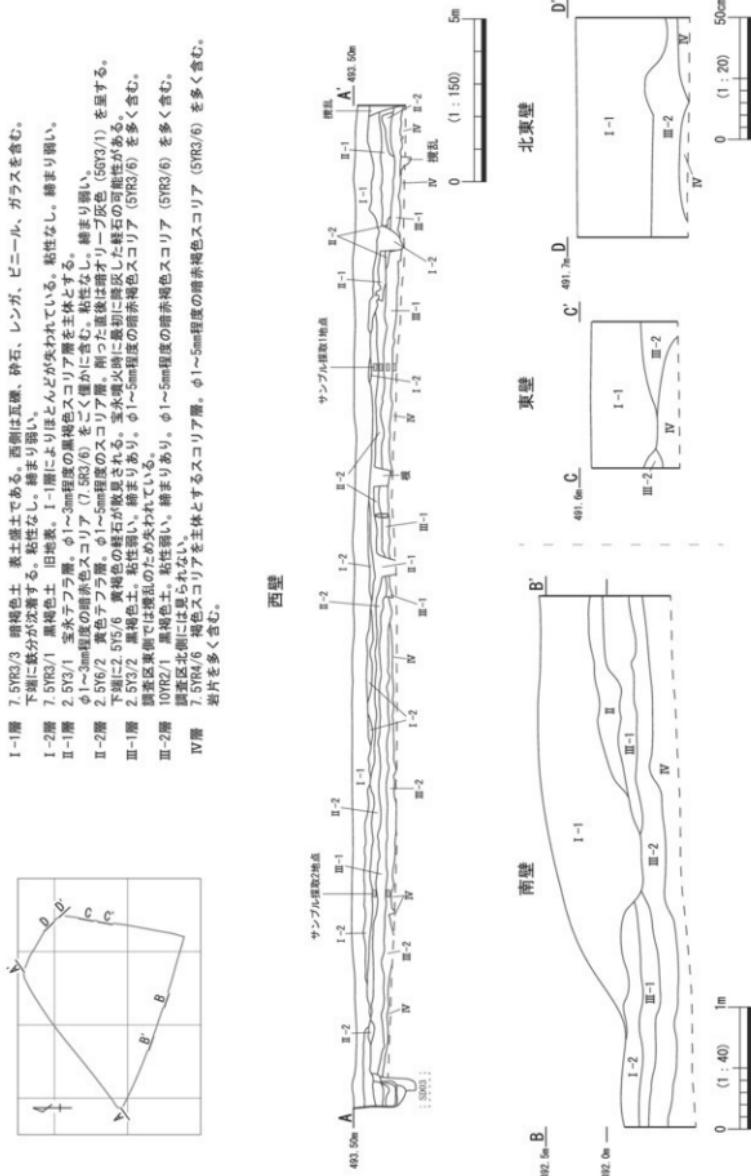
II-1層：宝永テフラ層の上部と想定される層。2.5Y3/1。粘性無く、締まり弱い。直径1～3mm程度の黒褐色スコリアを主体とする。直径1～3mm程度の暗赤色スコリア（7.5R3/6）をごく僅かに含む。

しを行って調査を終了した。高地で厳寒期に行われた調査のため、途中数度の積雪に見舞われた。その度ごとに調査参加者総出による雪かきで現地を復旧した。ただし、2月14～15日の積雪は、御殿場地区でも近年類を見ない記録的大雪であり、現地周辺で60cm程度の雪積があったため、2月23日まで調査の中止を余儀なくされた。

3 資料調査（整理作業、報告書作成）

平成26年10月から平成27年3月にかけて、埋蔵文化財センター本部にて本整理作業を実施した。ただし、試掘確認調査を含め、基礎整理作業や調査報告書作成のための資料調査等は、調査終了後必要に応じて行っている。

原稿執筆以外の作業を、株式会社パソナに委



第5図 立道跡本調査区土層図

II-2層：宝永テフラ層の下部と想定される層。直径1～5mm程度のスコリアを主体とする。検出された直後は暗オリーブ灰色(5GY3/1)だが、乾燥すると黄色(2.5Y6/2)に変化する。最下部に、直径数cm、不定形の黄褐色鉄石が散見される。宝永噴火の最初に降下した鉄石であろうか。

III-1層：黒褐色土。2.5Y3/2。粘性弱く、締まりあり。直径1～5mm程度の暗赤褐色スコリア(5YR3/6)を多く含む。調査区東側では擾乱のため失われている。

III-2層：黒色土。10YR2/1。粘性弱く、締まりあり。直径1～5mm程度の暗赤褐色スコリア(5YR3/6)を多く含む。III-1層に比べて黑色味が強く、明瞭に区分できる。本調査の遺物は、I層出土のものを除いてこの層から出土している。

IV層：7.5YR4/6。赤褐色スコリアを主体とする層。直径1～5mm程度の暗赤褐色スコリア(5YR3/6)を多く含む。岩片を多く含む。この層の上面を、今回の本調査の遺構確認面とした。本調査区の土層堆積状況を見ると、この基本土層が完全に見られるのは、調査区の西側だけである。東側では、II層の宝永テフラ層が見られない。

2 試掘確認調査のテストピットの土層(第6図)

調査したTPは17箇所あり、そのうちのTP09は本調査の調査区内に含まれる。以下、個々に概説する。なお、土層名は本調査の標準土層と区別するため、1・2・3…とした。TPごとに個別に記載しているので、仮に3層と表記していても、TPごとに内容が異なる。また、本調査の標準土層は前述のとおり、ローマ数字で表記している。なお、大半のTPの最下部で検出された淡黄灰色土ないし淡灰色硬質砂はマサ土(御殿場泥流層)と考えられる。

TP01：乱れた層準を示す。各層の比定は不明である。遺構・遺物とも検出されなかった。

TP02：ほぼ水平で整った層準を示す。2層が標準土層のⅢ層に、3層がⅣ層に対比されるか。遺構・遺物とも検出されなかった。

TP03：3層以下は乱れた層準を示す。3層が標準土層のⅣ層に対比されるか。2層から近世陶器が1片検出された。

TP04：ほぼ水平で整った層準を示す。3層が標準土層のⅡ層(宝永テフラ)に、4層がⅢ層に、5層がⅣ層に対比されるか。5層上面で長方形土坑が検出された。遺物の出土はない。

TP05：ほぼ水平の層準を示す。2層がⅢ層に、3層がⅣ層に対比されるか。遺構・遺物は検出されなかった。

TP06：ほぼ水平の層準を示す。ただし、長径が1mを超すと想定される石が下部から出土している。2層がⅢ層に、3層がⅣ層に対比されるか。遺構・遺物は検出されなかった。

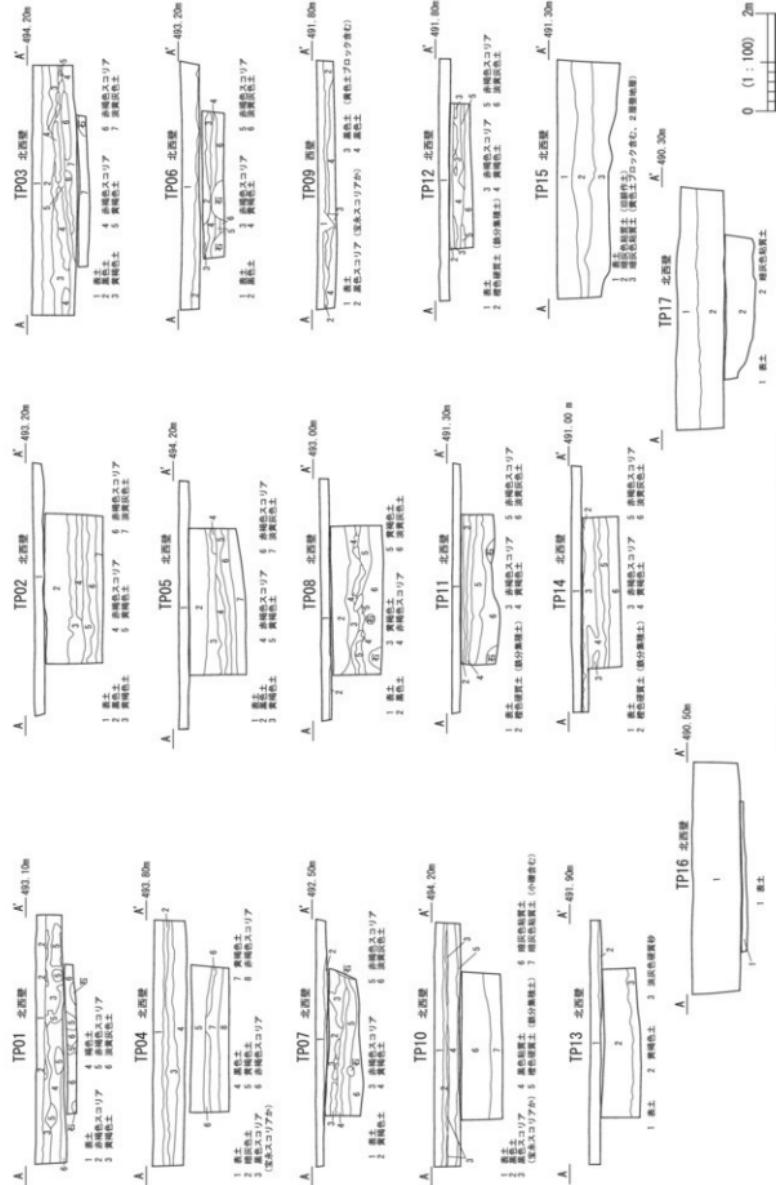
TP07：4層以下はほぼ水平の層準を示す。石が下部からやや多く出土した。2層がⅣ層に対比されるか。遺構・遺物は検出されなかった。

TP08：4層以下は乱れた層準を示す。2層が標準土層のⅢ層に、3層がⅣ層に対比されるか。1層から土師器と思われる小片が数片検出された。客土中に含まれていた可能性もある。

TP09：本調査区内である。2層が標準土層のⅡ層(宝永テフラ)に、3・4層がⅢ層に比定されるか。大型の円形土坑2基が比較的近接して検出され、本調査のきっかけとなった。表土中より、灰釉陶器片、近世陶磁器片が検出されている。

TP10：ほぼ水平で整った層準を示す。5層は鉄分が集積した硬質土であり、水田の床土である可能性が高い。表土中より近世陶器が出土した。遺構は検出されなかった。

TP11：ほぼ水平の層準を示す。ただし、石が下部から出土している。2層は鉄分が集積した硬質土であり、水田の床土である可能性が高い。3層がⅣ層に対比されるか。表土中より土師器



第6図 新東名No.4地点試掘確認調査土層図

と思われる小片が検出された。客土に含まれていた可能性もある。遺構は検出されなかった。
T P 1 2 : ほぼ水平の層準を示す。2層は鉄分が集積した硬質土であり、水田の床土である可能性が高い。表土中より近世の擂鉢片が出土した。遺構は検出されなかった。

T P 1 3 : ほぼ水平の層準を示す。写真で判断する限り2層中にスコリアの集中している箇所があるようである。表土及び2層中から近世の陶磁器片が出土した。遺構は検出されなかった。

T P 1 4 : ほぼ水平の層準を示すが3層と4層の間で乱れがある。2層は鉄分が集積した硬質土であり、水田の床土である可能性が高い。3層がIV層に対比されるか。遺構は3層上面を確認面としてピットが1基検出された。遺物は無い。

T P 1 5 : ほぼ水平の層準を示すが、西側では2層（旧耕作土）がやや薄い。遺構・遺物は無い。湧水が顕著であった。

T P 1 6 : 湧水が顕著であった。遺構・遺物は無い。

T P 1 7 : 表土下が粘質土になり、湧水があった。遺構・遺物は無い。

以上述べたことをまとめると、宝永テフラと想定される層が検出されたのはTP04、09、10である。また、TP02、03、05、06、08では宝永テフラ想定層は検出されなかったが、本調査の標準土層に近い層序を示す。これに対して、TP11～14は、多くの地点で鉄分が集積した硬化面が見られ、硬化面の下がすぐに赤色系のスコリアを多く含む層となる。また、TP15～17は粘質土が厚く堆積している箇所が多く、湧水が見られるため谷地形が想定される。



積雪に覆われた調査区



遺構掘削作業状況



テフラ分析資料採取状況



遺物実測作業状況

第3章 調査の成果

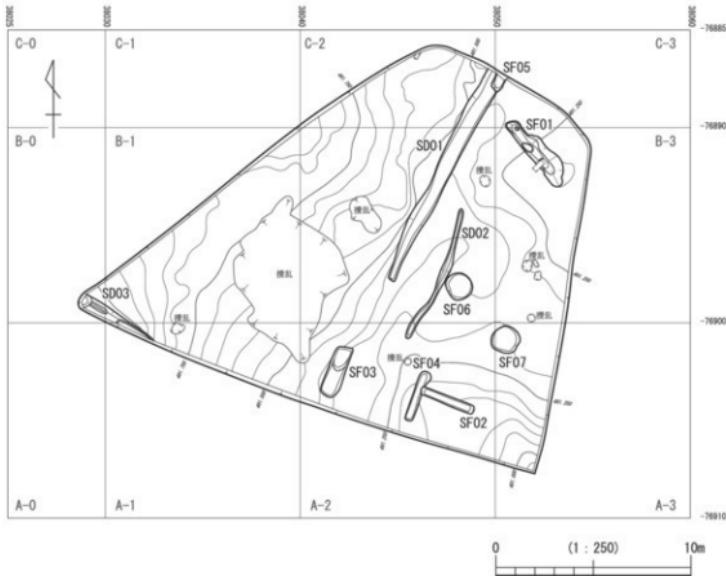
第1節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、本調査区で、土坑（S F）7基、溝状遺構（S D）3基である（第7図）。土坑は大型の円形土坑2基、長方形状の土坑5基からなる。円形土坑の方は試掘確認調査のT P 0 9で検出され調査されたが、前章で述べたとおり、本調査区に含める。

試掘確認調査では、土坑1基（S F 0 8）、小穴1基（S P 0 1）が検出された。

遺構は、標準土層のIV層ないしIV層に相当すると想定される層の上面を確認面として検出されている。遺構の存在する箇所は、宝永テフラが残存する堆積が最も良好な箇所からはずれており、宝永テフラとの先後関係は厳密には明らかにし得なかった。ただし、覆土はIII層に類似したものが大半であり、宝永テフラの降下以前の遺構と想定しているが、疑わしいものもあり、個々の遺構についての記述で詳述したい。また、遺構のデータ（サイズや主軸方向等）については、遺構一覧表（第1表）に譲る。

なお、今回の調査（試掘確認調査と本調査）で検出された遺構からは、遺物は一切出土していない。



第7図 本調査区遺構全体図

1 土坑（S F）（第8図）（図版2～3）

（1）S F 0 1（図版2-1）

B・C-3グリッドより検出された。調査区の北東隅に近い箇所である。本遺跡に特有の長大な土坑であるが、西側の立ち上がりは急であるのに対し、東側は緩やかに立ち上がる。平面図においては、西北端～西側壁は比較的端正であるが、東南端～東側において乱れた形状である。

最下部の底面には浅い穴が3箇所あり、最も北側のものはピット状を呈する。南側の2ヶ所の穴については不明である。

（2）S F 0 2（図版2-2・3）

A-2グリッドより検出された。本調査区で検出された遺構のうち、最も南東側に位置し、西側でS F 0 4と直角に重複している。本遺跡特有の長大な土坑である。幅（短軸）は狭く、平面形は非常に細長く整った印象を受ける。立ち上がりは、側面において特に急であり、端部の立ち上がりは側面に比べ、やや緩やかである。底面は平で水平に近い。覆土は2層に分かれるが、自然埋没の様相を示す。断面図では図示していないが、S F 0 4の覆土を切って構築されており、明らかにS F 0 4より新しい。

（3）S F 0 3（図版2-4）

A-2グリッドより検出された。本調査区の中央の南端に近い箇所に位置する。本遺跡特有の長大な土坑であるが、S F 0 2、0 4に比べて、長軸の長さに対して短軸の長さ（幅）が大きく、細長さは減じている。立ち上がりは、かなり急である。底面は南側に比べて北側がわずかに一段低くなっている、境界部分は緩やかな段（斜面）になっている、平面的には不正な隅丸長方形を呈す。

（4）S F 0 4（図版2-5）

A-2グリッドより検出された。東辺でS F 0 2と直角に重複している。本遺跡特有の長大な土坑である。S F 0 2と類似した形状だが、上端の平面形は丸まった印象を受ける（北端部は歪んだ隅丸長方形である）。幅は狭く、細長い印象を受ける。底面は平で水平に近い。断面図では図示していないが、S F 0 2により覆土を切られており、S F 0 2より古い。覆土もS F 0 2が黒褐色土なのに対して暗灰色であり、明瞭に相違する。

（5）S F 0 5（図版2-6・7）

C-2・3グリッドより検出された。本調査区で検出された遺構のうち最も北側に位置する遺構の一つである。北側は調査区外のため未調査であり、長軸長は不明である。上端の平面形はやや歪んだ隅丸長方形と想定され、長軸方向の辺の立ち上がりは非常に急である。大半が調査区外だと思われるが、本遺跡特有の長大な土坑である可能性が高い。S F 0 5の埋没後にS D 0 1がつくられており、明確な先後関係を示す。覆土もS F 0 5が褐灰色土なのに対して、S D 0 1は黒褐色土であり、明瞭に相違する。

（6）S F 0 6（図版2-8）

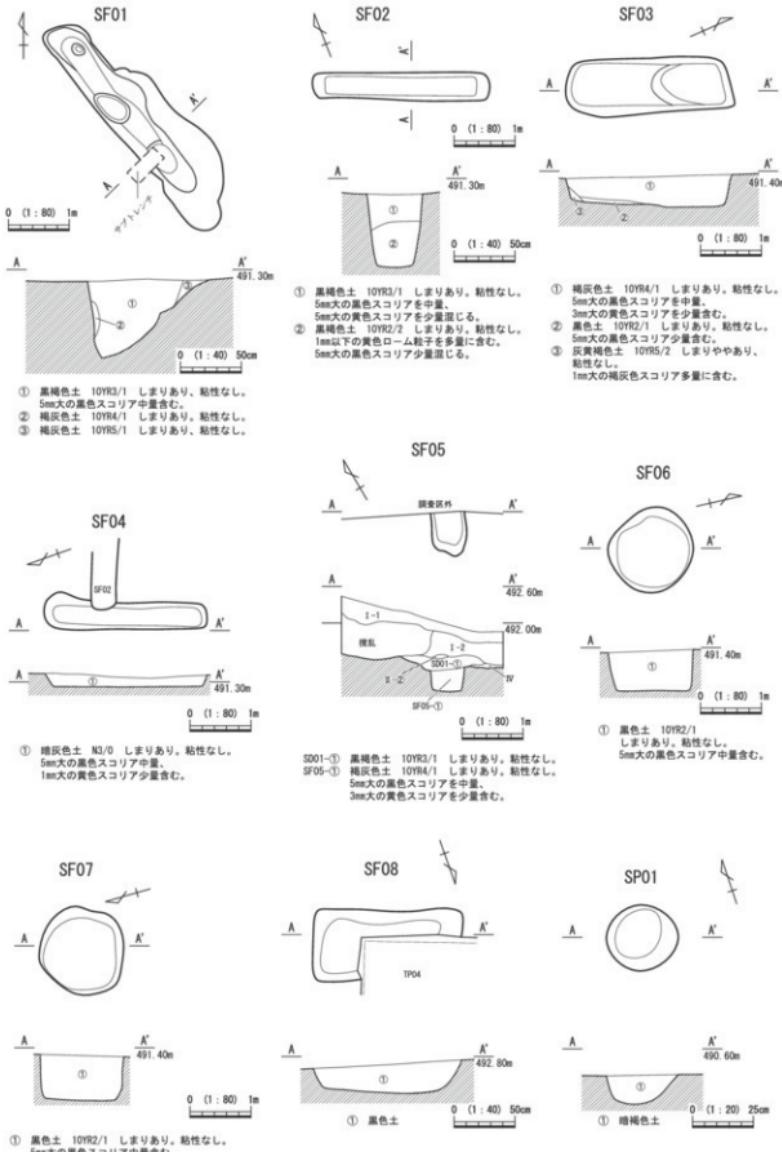
B-2グリッドより検出された。立ち上がりは非常に急であり、一部はほとんど垂直に近い。底面は平でほとんど水平である。いわゆる「円形土坑」であるが、県東部の遺跡でしばしば発見されるものと比較して、平面形が大きく、深さは深く、異質なものと言えそうである。

（7）S F 0 7（図版3-1）

A-2・3グリッドより検出された。平面形は若干歪んだ円形である。立ち上がりは非常に急な部分が多く、一部はほとんど垂直に近い。底面は平でほとんど水平である。S F 0 6に酷似した、いわゆる「円形土坑」である。覆土も同一と言って差し支えないほどであり、位置も近く、高度の類似性と「同時性」を看取できる。

（8）S F 0 8（図版3-2）

試掘確認調査のT P 0 4から検出された。今回の調査（No.4地点試掘確認調査を含めて）で最も北側



第8図 個別造構図①

で検出された遺構である。遺構の北西部分はテストピットの深掘りによって壊されてしまった。平面形は長方形を呈する。立ち上がりはやや緩やかで、断面形態は長軸、短軸共に逆台形を呈する。長方形の土坑であるが、今回の立道遺跡の本調査で検出された長大な土坑（S F 0 2、0 4が典型）に比べて、短軸に対する長軸の比率が小さく、立ち上がりも緩やかで、特徴に乏しい長方形土坑という印象を受ける。覆土は黒色土一色であった。

2 溝状遺構（S D）（第9図）（図版2、3）

（1）SD01（図版2-7、3-3）

B-2、C-2・3グリッドより検出された。本調査区の北東辺から南西方向に延びる溝で、南側は遺構確認面からの深さが浅くなり、最後に掘り込みが消滅している。北東は調査区外となる。調査区北東辺の土層断面を見る限り、土坑S F 0 5が埋没してからSD 0 1の覆土が堆積しており、明確な先後関係を示す。また、この断面図ではSD 0 1の覆土の上は、大部分が標準土層のI-2層（旧耕作土）であるが、ブロック的にII-2層（宝永テフラの下部層）が存在する。ただし、このII-2層は耕作土中に入った二次的なもの可能性があるために、SD 0 1と宝永テフラ層との先後関係は明確にはできない。全体として掘り込みは浅く、水路等の溝であるとは想定しにくいであろう。

（2）SD02

A・B-2グリッドより検出された。確認面からの深さが極めて浅い、北東～南西方向に走る溝である。僅かであるが緩やかにカーブしている。両端部近くになると遺構確認面からの深さが浅くなり、最後に掘り込みが消滅している。SD 0 1と並行しており、関連する遺構の可能性がある。S F 0 6の大型円形土坑と極めて近接しているが、重複してはおらず、先後関係は分からぬ。

（3）SD03（図版3-4・5）

A-1、B-0・1グリッドより検出された。本調査区の西側コーナー部分に存在し、調査区端部であるため、遺構の大部分が調査区外であると思われる。北西～南東方向に走る溝と想定される。遺構確認面からの深さが最深部で約1mあり、相當に深く、SD 0 1、0 2と趣を異にする。溝状遺構に分類したが、本遺跡特有の長大な土坑の可能性もある。覆土は自然堆積であるが数層に分かれ、1～2層からなる大半の遺構と異なる。SD 0 3は土層断面B-B'で見る限りIII-1層を切っており、それより新しいことは確実であるが、宝永テフラが残存しない部分であるため、II層（宝永テフラ層）との先後関係は不明である。遺構覆土の上はI-2層（旧耕作土）で、耕作により遺構の上部が削られた可能性もある。

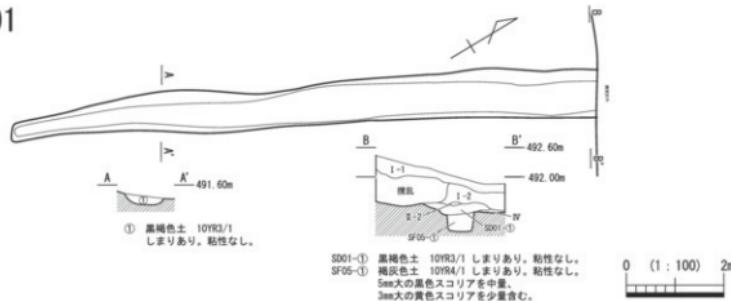
底部には、北西側調査区端にピット状の落ち込みがあり、また、それより南東側に土坑状の落ち込みが2ヶ所ある。

3 小穴（S P）（第8図）

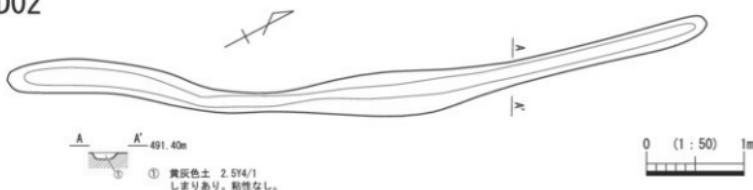
SP01（図版3-6）

試掘確認調査のT P 1 4から検出された。今回の調査（No.4地点試掘確認調査を含めて）で最も南側で検出された遺構である。水田床土と想定される2層（橙色硬質土）を掘り込む形で検出された。覆土は暗褐色土の1層のみであるが、表土ではない。立ち上がりは緩やかである。また、付近から他の小穴等検出されておらず、建物の柱穴とはやや考えにくく。極めて新しい時代の遺構である可能性もある。

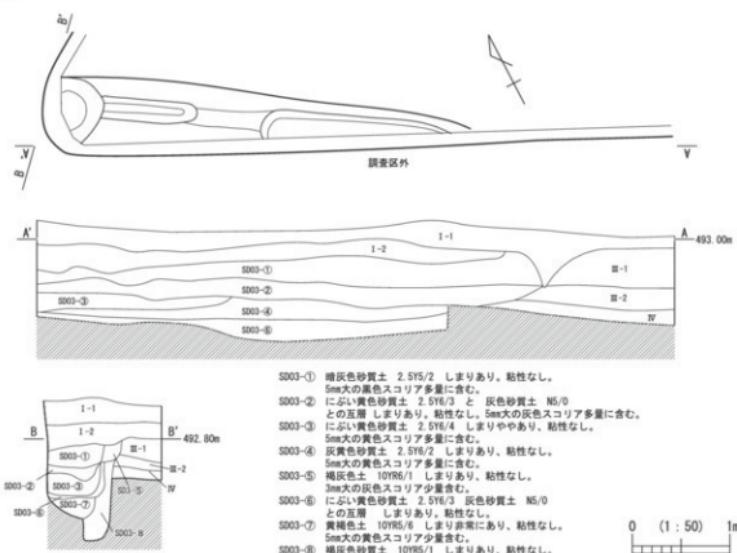
SD01



SD02



SD03



第9図 個別遺構図(2)

第1表 遺構一覧表

遺構名	グリッド(TP)	長さ(長径)(m)	幅(短径)(m)	深さ(m)	主軸方位	備考	挿図	写真図版
SF01	B-3 C-3	4.26	1.20	0.65	N40°W		第8図	2-1
SF02	A-2	2.94	0.50	0.61	N69°W	SF04を切る	第8図	2-2.3
SF03	A-2	2.78	0.97	0.54	N21°E		第8図	2-4
SF04	A-2	2.70	0.65	0.23	N19°E	SF02に切られる	第8図	2-5
SF05	C-2.3	(0.76)	0.62	0.41	N30°E	埋没後にSD01が構築される	第8図	2-6.7
SF06	B-2	1.44	1.43	0.69	N13°E	「円形土壙」	第8図	2-8
SF07	A-2.3	1.48	1.42	0.77	N15°E	「円形土壙」	第8図	3-1
SF08	TP04	(1.26)	0.61	0.28	N70°W		第8図	3-2
SD01	B-2 C-2.3	(12.10)	(1.54)	(0.27)	N31°E		第9図	2-7.3-3
SD02	A-2 B-2	7.19	1.05	0.08	N28°E		第9図	
SD03	A-1 B-0.1	(6.49)	(1.28)	(1.04)	N62°W		第9図	3-4.5
SP01	TP14	0.30	0.28	0.12	N18°E		第8図	3-6

第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、本調査では4点、試掘確認調査では15点である。その内訳は本調査区では、包含層から土器1点と陶器1点、盛土及び旧表土中（I層）より陶器1点と磁器の瓶1点のみ採取できた。後者には磨石の疑いのある円鏡1点があったが、断定するには至らなかったので、遺物としては扱わない。なおI層中の遺物は重機掘削中に採取したものである。

試掘確認調査の遺物の内訳は、TP03の2層から1点（陶器）、TP08の表土から3点（土器）、TP09の表土から4点（土器・陶磁器）、TP10の表土から1点（陶器）、TP11の表土から2点（土器）、TP12の表土から1点（陶器）、TP13の2層から3点（陶器）、表土から1点（磁器）である。このうち、表土中から出土した遺物は大半が現在の水田耕作土中から出土したものであり、客土の可能性もあるため、真に本遺跡あるいは、出土した箇所の遺物であるか不明である。

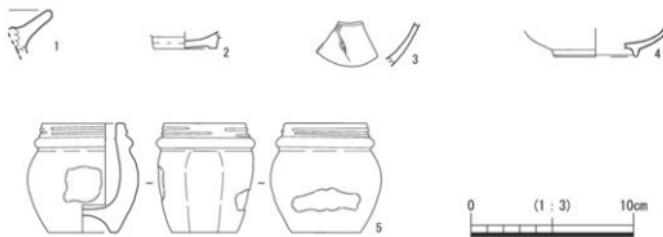
試掘確認調査はともかく、本調査区では遺構が検出されたにもかかわらず、包含層中より出土した遺物量が極端に僅少である点は、今回の調査地点が、耕作等を除き日常的にはほとんど人の立ち入らない場所であることを強く窺わせる。

（1）立道遺跡本調査出土の遺物

第10図-1（図版4-3）は、極めて薄い釉薬が内外面にかかった常滑の甕の口縁部破片である。胎土に金雲母が少量混入しているのが目立つ。骨壺として利用される甕の可能性が強い。図版4-3-①は素焼きであるが、器壁も薄く胎土は精選されており堅緻な感じを受ける。以上の2点は江戸時代包含層とみなしたIII-2層中より出土した。2点とも近世のものとしか判断できない。

以下は重機掘削時にI層中より採取したものである。図版4-3-②は常滑焼の分厚い破片で、容器以外のものの可能性もある。極めて新しい時期の遺物かもしれない。表面には横方向の沈線が見られる。小石が混入する粗い胎土である。第10図-5（図版4-4・5）は磁器瓶で、型づくりにより製作されたものである。口縁部は円筒形でスクリュー栓を取り付ける形式であるが、ネジ部分に2箇所切れ目があり、全周しない。本体部の外形は横断面が梢円形であるが、端面が面取りされており、4本の稜線が形成されている。むしろ長辺が膨らんだ不整な長方形と言うべきかもしれない。胴部には2箇所ラベルを貼るために区画が設けられる。共に長辺側の面で、一箇所は面のほぼ中央部の不整な正方形の窪みであり、もう一箇所は対反の面の中央よりやや下側にある、不整であるが左右対称の逆台形を呈する窪みである。この瓶は化粧クリームの瓶と考えられるが（桜井 2006）（明治大学校地内遺跡調査団 2011）、本体部が円筒形ではなく、多少疑問が残る。底面に製造記号がある。横書きの2行からなり、1行目はやや図案化されているが、「岐」、2行目が「847」で、緑色で印字した後、釉をかけて焼成したものであ

ろう。1行目の「岐」は岐阜の略号である。2行目の数字は統制番号である。岐阜県土岐郡下石町（現土岐市）で、アジア・太平洋戦争期の1941（昭和16）年から1945（昭和20）年までに、統制下で生産された磁器瓶である（桃井 1997）（美濃古窯研究会 1999）（註1）。



第10図 出土遺物実測図

（2）試掘確認調査出土の遺物

第10図－2はTP03の2層（黒色土）出土の陶器の底部である。内面に鉄軸がかかる。17世紀末～18世紀初頭の丸碗である。3はTP13の2層出土の磁器碗である。破片が部分的なため染付が何を描いたかは不明である。19世紀のものか。4もTP09表土出土の磁器碗である。豊付を除き、高台内まで軸がかけられている。明治以降の可能性が高い。

図版4－1・2－①～④はともに土師器片。①・②は口縁部で、①は鉢の可能性があり、内外面とともに赤彩されている。②は恐らく甕であろう。③と④は甕の胴部破片である。③は頸部の屈曲部の破片である。⑤は小片だが灰釉陶器ないし初期の山茶碗で、胎土等からみて、12～13世紀の東遠江産であろう。⑥は捕鉢で⑦も捕鉢の可能性が高い。ともに江戸時代。⑧・⑨は内外面ともに鉄軸をかける口縁部で、非常に類似しているが別個体である。小片のため、近世以降としかわからない。⑩・⑪は18世紀の腰錆茶碗で、⑫は口縁。⑬は瀬戸美濃の志野で、17世紀の可能性がある。①・③はTP08、②・④はTP11、⑤・⑧・⑫はTP09、⑥はTP12、⑦はTP10、⑨～⑪はTP13出土。写真のみ掲載したもののは⑨～⑪のみTP13の2層で出土した以外は、全て表土出土であり、客土中に含まれていた可能性がある。

第2表 遺物観察表

検査番号	開拓番号	グリッド(TP)	層位	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	その他の	色調	胎土
1	4-3	A-2	田-2層	常滑	甕	口縁	-	-	(2.60)	-	内 7.5YR6/4 1.5cm粒 外 5YR6/6 橙色	0.1mm程の白色砂粒を含む キラキラとした細かい粒子も多く含む
2	4-12	TP03	黒色土層	瀬戸美濃	丸瓶	底部	-	3.90	(1.10)	-	内 10YR3/3 喷褐色 外 2.5YR2/2 灰白色	0.2mm程の白色砂粒を含む 1mmの半透明の砂粒を僅かに含む
3	4-12	TP13	2層	磁器	甕	胴部	-	-	(2.70)	-	N8/0 灰白色	細かい白色粒子を含む
4	4-12	TP09	表土	磁器	甕	底部	-	(5.00)	(1.70)	-	N8/0 灰白色	細かい白色粒子を含む
5	4-4.5	本調査区	I層	磁器	瓶	完形	5.00	4.20	6.70	胴部最大径 6.8	N8/0 灰白色	

註

（1）この記号は、岐阜県陶磁器工業協同組合連合会による統制番号で、1941（昭和16）年に制定された。1941年の「生産者別標示記号」と1948（昭和23）年の「工場記号番号」が綴として現存し、公表されている（桃井 1997）（美濃古窯研究会 1999）。それによれば、記号番号の847は両者とも、下石陶磁器工業協同組合に属する製造所である。1941年の綴では、「下石町」の「青木善吉」氏の氏名が、1948年の綴では、「土岐郡下石町」の「安藤太三郎」氏の名が代表者名として記載されている（ともに会社・工場名の記載はない）。

第4章 まとめ

1 宝永テフラと遺跡との関連

本調査区の西側を中心として検出された宝永テフラは、プライマリーな堆積を示すと考えられる。

近年、文献史料を中心とした情報源により、各地域での宝永テフラの詳細な降砂量が想定されるに至っている（第11図）（小山町 1998）。この図によるならば、本遺跡の立地する茱萸沢地区では50cm～1mの降砂量が想定されている。今回の調査における、宝永テフラ層の最大層厚は約42cmである（木の根等の穴に落ち込んだテフラ層の箇所は除く）。層の上部の流失等により、層厚が若干減じたと考えるならば、降砂量の想定を裏付ける形となつたと見なして良いであろう。

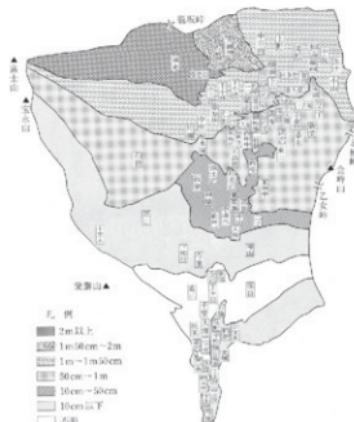
2 今回の調査で検出された遺構について

今回の調査で検出された遺構は、大半が宝永テフラ降下以前に構築されたものと考えられる。詳細については個々の遺構ごとに判断するより他はないが、今回発見された遺構は、人の居住跡を直接示すものではなく、遺跡全体を対象にしても遺物量も非常に僅少である。しかし、他に類例の少ない遺構も存在すると考えられるので、遺構同士の関係についても触れながら若干の考察をしていきたい。

（1）土坑

今回の調査で発見された土坑は、大別すると、平面形が長方形を基準とするものと、いわゆる「円形土坑」に分けられる。前者は、①極めて長大で細長く整然とした形態であるか、それをモデルとするもの、②長軸と短軸の比が小さいものの2種に細別できる。①は最も典型的にはS F 0 2とS F 0 4であり、S F 0 3も若干形の崩れがあるが含めて良いであろう。S F 0 1は恐らく搅乱等で二次的な変形があるが、恐らくは①に入ると想定できる。S F 0 5は調査が部分的で不明である。②は試掘確認調査で検出されたS F 0 8である。

①の土坑であるが、その大きな特徴として、底面は平坦で、急激（部分的には垂直近く）に立ち上がる。遺構検出面からではあるが、一定の深度を有するという特徴を持っている。類例は管見の限りほとんど見出すことはできない。近世以降の遺跡からしばしば検出される、耕作痕とされる浅い溝とも、いわゆる「イモ穴」とも異なっている。最近、神奈川県山北町河村城跡から、覆土が宝永テフラのみの土坑が多数発見されている（山北町教委 2007）。掘り込みの形状は本遺跡で検出されたものとほとんど同一であるが、（1）河村城跡検出のものが列状をなし、長軸の方向がほぼ同一であるのに対して、本遺跡の土坑は群集せず、長軸方向が揃っていない。（2）本遺跡の土坑の覆土にはスコリア等が含まれるが、河村城跡の土坑のように宝永テフラのみで充満しているわけではない。（3）宝永テフラとの先後関係が明確ではなく、恐らく宝永テフラ降下以前の遺構である。という点において相異がある。このように考えてゆくと、



第11図 宝永噴火の降砂量
（小山町 1998）より引用 一部改変

本遺跡の土坑は、宝永テフラを除去すること目的にしたものではなく、通常の耕作等のために行った天地返しのための溝状の土坑とみなすのが妥当であると思われる。

②の土坑は一般的な「イモ穴」とみなして良いであろう。

次に「円形土坑」の方であるが、静岡県東部地域で検出される一般的な円形土坑と、平面的な規模や深さにおいてかなり異なり、極めて大規模である。また、第3章で前述したが、発見された2基は形状、覆土が酷似しており、位置も近接しており、強い関連性、ひいては「同時性」を窺わせる。人の立ち入りが日常的にはない場所であった点を考慮すれば、貯蔵穴等ではなく、墓壙の可能性が高いと考える。

(2) 溝状遺構その他

今回の調査で検出された土坑以外の遺構は溝状遺構3基と小穴1基である。このうち、SD03は部分的な調査で、土坑の可能性もあるため、SD01、02のみを対象にしたい。何れも確認面からの深さは浅く、両端部は浅くなっている掘り込みが消失するという程度の溝である。宝永スコリアとの先後関係は不明である。位置的には近接してほぼ平行する関係にある。用水等の溝とは考え難く、恐らくは耕地を区画するような溝であろう。また、「円形土坑」と近接しており、「墓地」を区画する溝の可能性も考えられる。小穴SP01は単独の発見で、建物の柱穴かどうかはわからない。

引用・参考文献

- 足立順司 1997 「曼荼羅曼珠の花ぞ降る－六十六部題国経筒の研究－」『研究紀要』第5号 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 上杉陽・砂田佳弘 2008 「富士一河村城スコリアFj-Kw」（仮称）の発見について』『河村城跡』神奈川県山北町文化財調査報告2 山北町教育委員会
- 小山町 1998 『小山町史 第7巻 近世通史編』
- 勝俣竜哉 2005 「御殿場市内における甲変型土器の様相～食膳具について～」『静岡県考古学研究』№37
- 御殿場市 1982 『御殿場市史 別巻I』
- 御殿場市教育委員会 1977 『永原追分遺跡 静岡県御殿場市立南中学校々庭内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 御殿場市教育委員会 1991 『馬見塚遺跡詳細分布調査報告』
- 御殿場市教育委員会 2000 『永原追分C遺跡』
- 御殿場市教育委員会 2001 『中田遺跡（III次・IV次調査）－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 御殿場市教育委員会 2010 『中田遺跡2009 松ノ木田遺跡2009』
- 御殿場市教育委員会 2014 『中田遺跡（VI次調査） 松ノ木田遺跡（III次調査）』
- 桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』 六一書房
- 静岡県 1996 『静岡県史 別編2 自然災害誌』
- 静岡県教育委員会 1988 『静岡県文化財地名表I －静岡市以東－』
- 静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳－資料編－』 静岡県文化財調査報告書第55集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2014 『御殿場市神山・駒門の遺跡群』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第42集
- 永原慶二 2002 『富士山宝永大爆発』 集英社新書
- 富士市教育委員会 2002 『東平遺跡 第十六地区（三日市庵寺跡）、第二十七地区発掘調査報告書』
- 美濃古窯研究会 1999 『美濃の古陶』 美濃古窯研究会会報第8号
- 明治大学校地内遺跡調査団 2011 『下原・富士見町遺跡I』 明治大学校地内遺跡調査団調査報告書3
- 桃井勝 1997 『工場記号番号－昭和23年岐阜県陶磁器工業協同組合員工場記号番号－』『多治見市文化財保護センター研究紀要』第3号
- 山北町教育委員会 2007 『河村城跡』 神奈川県山北町文化財調査報告1

付編 立道遺跡のテフラ層

藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）

1.はじめに

立道遺跡は、御殿場市の国道246号線バイパスの、ぐみ沢丸田交差点の北西約400mの県道23号線沿いに位置する。遺跡は、富士山の裾野東側の緩やかな斜面に位置する。

調査では、土坑8基、溝状遺構3基、小穴1基が検出された。これらの遺構の大半は、宝永テフラの降下に先行して構築された、17世紀以前の遺構であると考えられている。

ここでは、本調査区西壁において検出されたテフラ層について検討した。

2. 試料と方法

試料は、本調査区西壁の2ヶ所において検出された6試料である（表1）。

表1 分析試料とその特徴

分析No.	採取位置	土層名	土層注記	スコリア粒子等の特徴（内眼および1φ筛残渣）	宮地(1984)および宮地(1988)との対比
1	1地点（西壁北側）	II-1層	宝永上部	発泡良い黒色（最大14mm）>発泡良い黒灰色	Ho-IV
2		II-2層	宝永下部	発泡悪い黒色>発泡や悪い黒灰色、発泡良い赤色、黄褐色、黃白色輝石：細状（最大40mm）、玄武岩片、深成岩	Ho-I～II
3		III-1層	黒褐色土	発泡良い黄褐色（最大20mm）>発泡良い黒灰色、黒色、灰色岩片、玄武岩片	S-24-6または7～10
4		IV層	褐色土	発泡良い黄褐色（最大10mm）>発泡良い黒色、発泡良い黒灰色、灰色岩片	S-24-6または7～10
5	2地点（西壁南側）	II-2層	宝永下部	発泡悪い黒灰色（最大14mm）>発泡や悪い黒色、発泡良い赤色、黄褐色、玄武岩片	Ho-II
6		III-2層	黒褐色土	発泡良い黄褐色（最大21mm）>発泡良い黒色、発泡良い黒灰色、灰色岩片	S-24-6または7～10

各試料は、以下の方法で処理した。

乾燥状態で26～65g程度を秤量した後、1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)の4枚の篩を重ね、湿式ふるい分けした。各篩残渣は、乾燥した後、秤量した。

分析は、主に1φ筛残渣について、実体顕微鏡を用いてスコリアの色調、発泡度、その他付随する粒子について観察・記載した。また、各スコリアの鉱物組成を調べるために、1φ筛残渣の15g程度をアルミナ乳鉢で粉砕した後、4φ筛残渣を回収し、その一部について液相（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて軽鉱物と重鉱物に分離した。軽鉱物は、簡易プレパラートを作製し、斜長石、半透明スコリアガラスおよび不透明スコリアガラスについて同定・計数した。重鉱物は、封入剤カナダバルサムを用いてプレパラートを作製し、單斜輝石（Cpx）、斜方輝石（Opx）、カンラン石（Ol）等を同定・計数した。なお、重鉱物の同定・計数は、大型の鉱物についてのみを行い、微細鉱物からなるスコリア粒子は計数していない。

3. 結果および考察

以下では、各テフラ層の構成粒子の色調や発泡度等の特徴および鉱物組成について述べ、スコリアの対比について検討した。

分析No.1 (II-1層)

粗粒のスコリア粒子から構成されるテフラ層である（図版1-1a）。発泡が良い黒色スコリア（最大粒径14mm）を主とし、発泡が良い黒灰色スコリアを伴う（図版1-1b）。

湿式篩分けでは、1 φ 篩残渣が最も多く、全体の88.99%に及ぶ（表2）。スコリア中の軽鉱物組成は、淡褐色・黒色半透明ガラスが多く、褐色・黒色不透明ガラスも多い。また、重鉱物組成は、カンラン石が圧倒的に多く、斜方輝石と単斜輝石を伴う（表3）。

表2 湿式篩分け・重液分離の結果（上段：重量g、下段：個数%）

分析No.	処理乾燥重量 (g)	砂粒分の粒度組成(重量g)					重液分離(g)	
		1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	< 4 φ	軽鉱物	重鉱物
1	48.03	42.7404	3.6532	0.8272	0.2740	0.5352	0.1399	0.1182
		88.99	7.61	1.72	0.57	1.11	54.20	45.80
2	48.20	44.6371	0.7679	0.2561	0.1829	2.3560	0.1172	0.0411
		92.61	1.59	0.53	0.38	4.89	74.04	25.96
3	34.72	16.2274	1.4341	2.0514	2.0913	12.9158	0.1121	0.0633
		46.74	4.13	5.91	6.02	37.20	63.91	36.09
4	28.97	12.4812	1.2170	2.2127	2.1413	10.9178	0.1307	0.0646
		43.08	4.20	7.64	7.39	37.69	66.92	33.08
5	65.50	60.5243	1.0649	0.4028	0.3630	3.1450	0.1354	0.0562
		92.40	1.63	0.61	0.55	4.80	70.67	29.33
6	26.06	10.2259	0.7687	1.6537	2.6806	10.7311	0.0684	0.0442
		39.24	2.95	6.35	10.29	41.18	60.75	39.25

表3 4 φ 篩残渣中の鉱物組成（個数）

分析No.	分類群	軽鉱物		軽鉱物 の合計	重鉱物			重鉱物 の合計
		斜長石(Pl)	淡褐色・黒色 半透明ガラス (Tran-glass)		褐色・黒色 不透明ガラス (Opq-glass)	斜方輝石 (Opx)	單斜輝石 (Cpx)	
1	18	113	77	208	14	12	174	200
2	24	83	95	202	13	10	180	203
3	64	116	30	210	31	13	161	206
4	75	104	32	211	20	15	165	201
5	17	84	105	206	19	12	172	204
6	43	138	39	220	27	10	167	204

分析No. 2 (II - 2層)

粗粒のスコリア粒子から構成されるテフラ層である（図版1-2a）。発泡が悪い黒色スコリアや発泡がやや悪い黒灰色スコリアを主とし、発泡が良い赤色スコリア、黄褐色スコリア、綺状などを呈する黄色軽石（最大40mm）、玄武岩片、深成岩を含む（図版1-2b）。

湿式篩分けでは、1 φ 篩残渣が最も多く、全体の92.61%に及ぶ（表2）。スコリア中の軽鉱物組成は、褐色・黒色不透明ガラスが多く、淡褐色・黒色半透明ガラスも多い。また、重鉱物組成は、カンラン石が圧倒的に多く、斜方輝石と単斜輝石を伴う（表3）。

分析No. 3 (III - 1層)

粗粒のスコリア粒子を含む黒褐色土壤である（図版1-3a）。発泡が良い黄褐色スコリア（最大20mm）を主とし、発泡が良い黒灰色スコリア、黒色スコリア、灰色岩片、玄武岩片を含む（図版1-3b）。

湿式篩分けでは、1 φ 篩残渣が最も多く全体の46.74%であり、4 φ 以下の粒子が37.20%に及ぶ（表2）。スコリア中の軽鉱物組成は、透明感の強い褐色ガラスが多く、大型の斜長石も多い。また、重鉱物組成は、カンラン石が圧倒的に多く、斜方輝石と単斜輝石を伴う（表3）。

分析No. 4 (IV層)

粗粒のスコリア粒子を含む褐色土壤である（図版1-4a）。発泡が良い黄褐色スコリア（最大10mm）を主とし、発泡が良い黒色スコリア、発泡が良い黒灰色スコリア、灰色岩片を伴う（図版1-4b）。

湿式篩分けでは、 1ϕ 篩残渣が最も多く全体の43.08%であり、 4ϕ 以下の粒子が37.69%に及ぶ(表2)。スコリア中の軽鉱物組成は、透明感の強い褐色ガラスが多く、大型の斜長石も多い。また、重鉱物組成は、カンラン石が圧倒的に多く、斜方輝石と單斜輝石を伴う(表3)。

分析No.5 (II-2層)

粗粒のスコリア粒子から構成されるテフラ層である(図版2-5a)。発泡が悪い黒灰色スコリアや発泡がやや悪い黒色スコリア、発泡が良い赤色スコリア、黄褐色スコリア、玄武質岩片を伴う(図版2-5b)。

湿式篩分けでは、 1ϕ 篩残渣が最も多く、全体の92.40%に及ぶ(表2)。スコリア中の軽鉱物組成は、褐色・黒色不透明ガラスが多く、淡褐色・黒色半透明ガラスも多い。また、重鉱物組成は、カンラン石が圧倒的に多く、斜方輝石と單斜輝石を伴う(表3)。

分析No.6 (III-2層)

粗粒のスコリア粒子を含む黒褐色土壌である(図版2-6a)。発泡が良い黄褐色スコリア(最大21mm)を主とし、発泡が良い黒色スコリア、発泡が良い黒灰色スコリア、灰色岩片を含む(図版2-6b)。

湿式篩分けでは、 1ϕ 篩残渣が最も多く全体の39.24%であり、 4ϕ 以下の粒子が41.18%に及ぶ(表2)。スコリ

ア中の軽鉱物組成は、透明感の強い褐色ガラスが多く、大型の斜長石も多い。また、重鉱物組成は、カンラン石が圧倒的に多く、斜方輝石と單斜輝石を伴う(表3)。

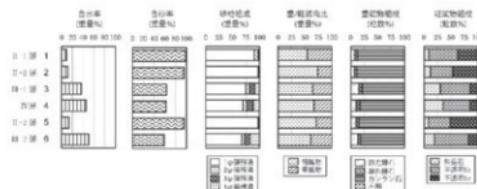


図1 各試料の含水率・含砂率・粒度組成・鉱物組成

以下に、宮地直道(1984)の宝永スコリアの記載を示す。

Ho-I:白から褐白色の軽石を主とし、縞状軽石、赤色スコリア、石質岩片を含む。石質岩片には、類質の玄武岩の他、黒曜石、深成岩が認められる。Ho-Iはさらに2つのfall-unit(Ia, Ib)に分けられる。下位のHo-Iaは白色軽石を主とし、上位のHo-Ibは褐白色軽石を主とする。Ho-Iaも褐色がかかった軽石を含むが、Ho-Ibの軽石とは色調が異なる。また、Ho-Ibの軽石はHo-Iaの軽石より細粒なものが多く淘汰が良い。Ho-IaとIbの境界は明瞭である。

Ho-II:稜を持った多面体の黒灰色スコリアを主とし、赤色スコリア、石質岩片を含む。Ho-IIに含まれる黒灰色スコリアは、他のグループの軽石やスコリアに比べて孔隙率が小さい(図版3-1)。石質岩片には類質の玄武岩の他、深成岩が認められる。深成岩の岩片が含まれる層準は、Ho-IIまで、Ho-III、-IVには含まれない。この他、少量だが白色軽石を含む。この軽石は円磨されているので、Ho-Iaの軽石のうち火口内に堆積したものが吹き飛ばされたものと考えられる。この軽石はHo-IIの最上部まで含まれる。

Ho-III:黒色スコリアを主とし、赤色スコリア、石質岩片を含む。Ho-IIと同質の孔隙率の小さい黒灰色スコリアが含まれるが、大部分の黒灰色スコリアより孔隙率の大きい黒色スコリアから成る。スコリア質粗粒火山灰層が複数はされており、最上部の黒灰色スコリアから成る粗粒火山灰層には遊離カンラン石が含まれる。

Ho-IV: 黒色および褐色スコリアを主とし、石質岩片を含む。赤色スコリアをほとんど含まない。スコリアや石質岩片が多数の薄い互層を成す。この互層は火口から20km以東では各unitを識別できなくなる。1707年降下火碎物を主とする二次堆積物に移行する。

検討した試料について、分析No.1は、発泡が良い黒色スコリアを主とし、赤色スコリアや石質岩片を含まないことから、Ho-IVに対比される。また、分析No.2は、発泡が悪い黒色スコリアを主とし、縞状などを呈する黄白色軽石を含むことから、Ho-I～IIに対比される。さらに、分析No.5は、発泡が悪い黒灰色スコリアを主とし、石質岩片を含み、灰白色軽石を含まないことから、Ho-IIに対比される。

また、以下に、宮地（1988）による延暦・貞觀テフラについて示す。

延暦～貞觀年間の噴火（A.D.800～865年）は、歴史時代の噴火のなかで宝永噴火（A.D.1707年）に次ぐ規模の大きなものであった。延暦～貞觀年間の噴火以降、宝永噴火までの間に、10回前後の小規模な噴火が断続的に起きた。特に、承平7年（A.D.937年）、長保元年（A.D.999年）、長元5年（A.D.1033年）、永保3年（A.D.1083年）の噴火は比較的規模が大きかったと思われる。

東麓のテフラのうちこの時期に噴出したものとしてはS-24-6または7～10（S-24-IまたはJ～K）が考えられる（図版3-2～4）。延暦～貞觀年間の噴火では多数の側火山が活動し、北西斜面の天神山と伊賀殿山から噴出した発泡が極めて良いスコリア、長尾山から噴出した発泡が良い黒灰色スコリア（貞觀6年：A.D.864年）などがある。

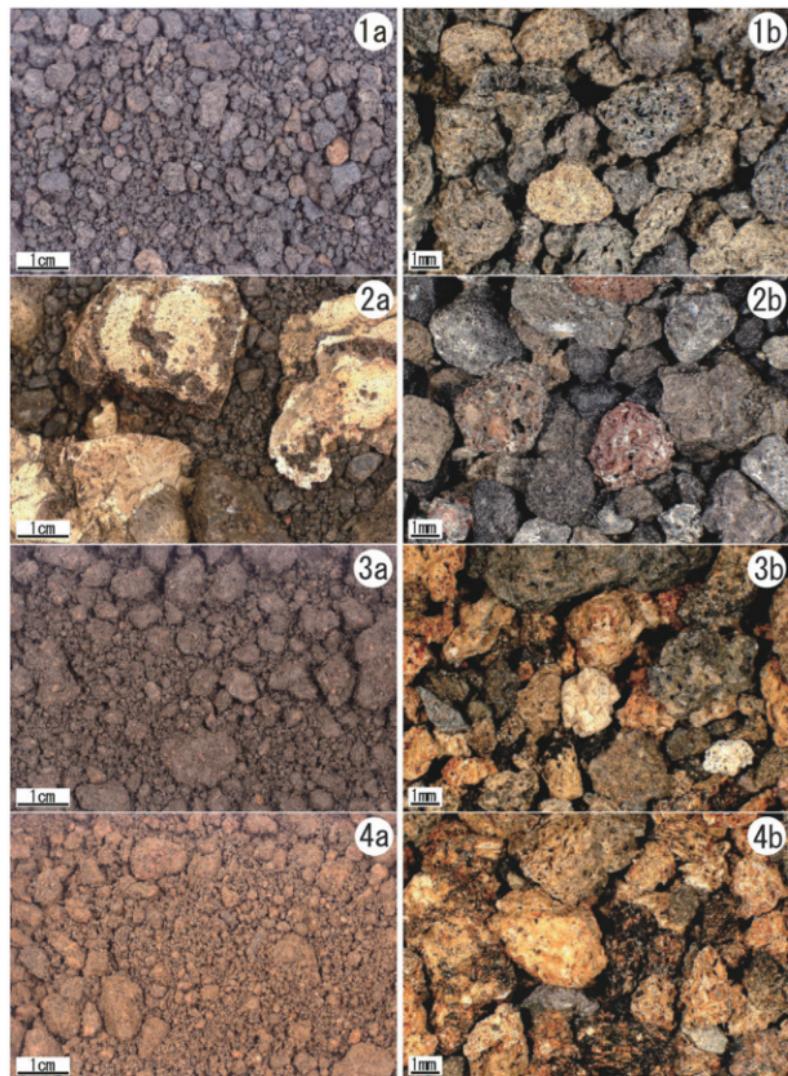
検討した試料について、分析No.3やNo.4あるいはNo.6は、宝永テフラ層の下位のスコリアを含む土壌であることから、この延暦～貞觀年間の噴火によるテフラ層と考えられる。

5. おわりに

立道遺跡のテフラ層について、構成するスコリアの特徴について検討した。その結果、分析No.1が、Ho-IV、分析No.2がHo-I～II、分析No.5がHo-IIに対比された。また、分析No.3やNo.4あるいはNo.6は、延暦～貞觀年間の噴火によるテフラ層と推定された。

引用文献

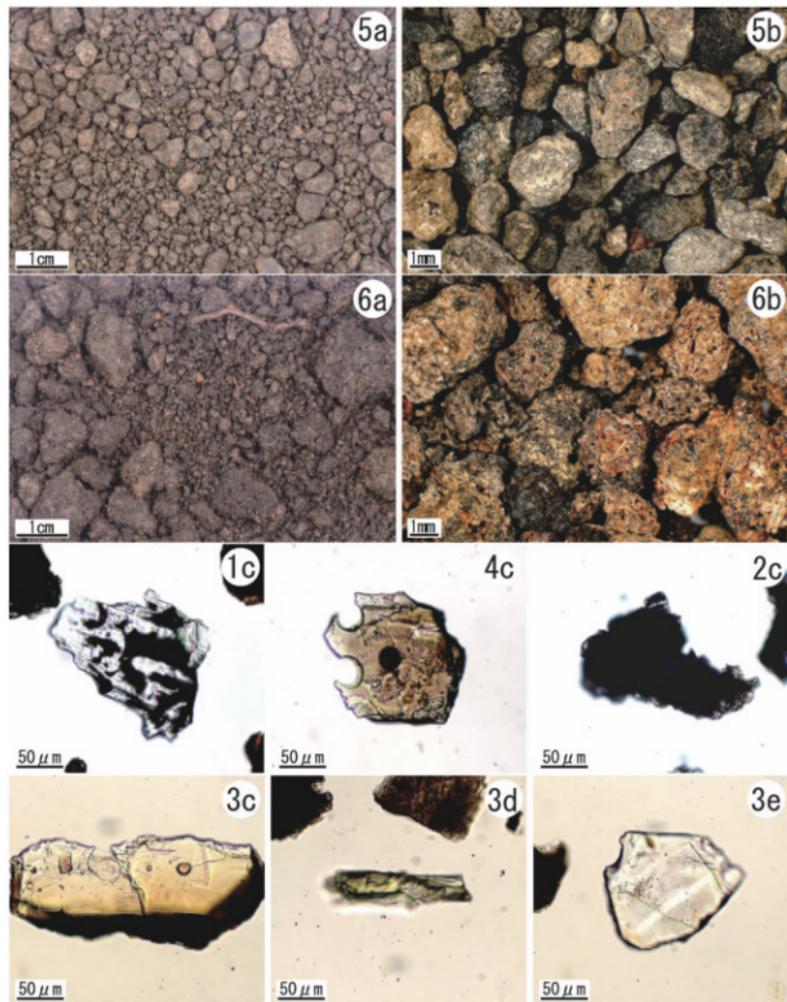
- 宮地直道（1984）富士火山1707年火碎物の降下に及ぼした風の影響。火山，第2集，第29巻，17～30。
宮地直道（1988）新富士火山の活動史。地質学雑誌，94，6，433～452。



図版1 採取試料と1φ筒残渣の実体顕微鏡写真

1a・1b. 分析 No. 1 (II-1 層) 2a・2b. 分析 No. 2 (II-2 層)

3a・3b. 分析 No. 3 (III-1 層) 4a・4b. 分析 No. 4 (IV 層)

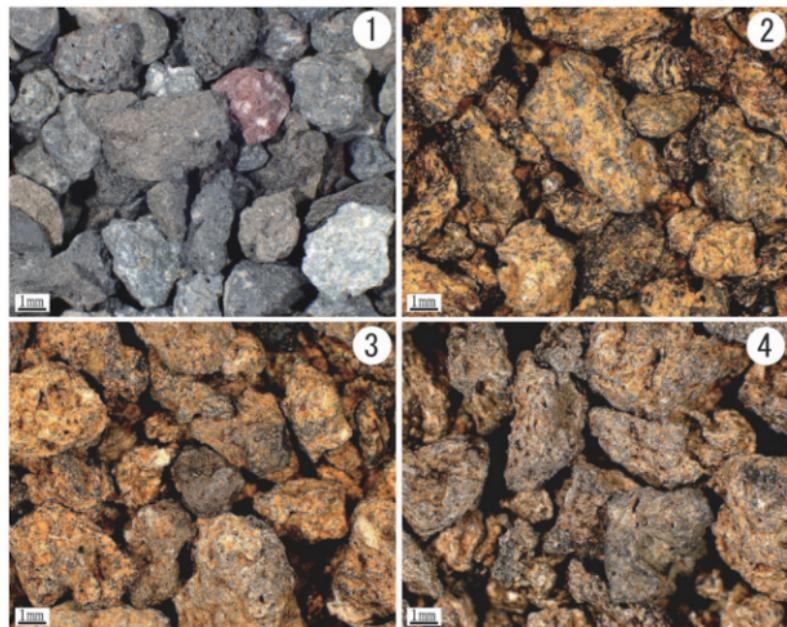


図版2 採取試料と1φ 篩残渣の実体顕微鏡写真（番号は分析No.に対応）

5a・5b. 分析No.5 (II-2層) 6a・6b. 分析No.6 (III-2層) 1c. 黒色半透明ガラス

4c. 淡褐色半透明ガラス 2c. 黒色不透明粒子 3c. 斜方輝石

3d. 單斜輝石 3e. カンラン石



図版3 宮地（1988）による標準スコリア試料の実体顕微鏡写真

1. Ho-II (太郎坊露頭) 2. S-24-8 (FJ-1101 地点) 3. S-24-9 (FJ-1101 地点)
4. S-24-10 (FJ-1101 地点)

写 真 図 版



1 立道遺跡本調査区遠景（南東より）



2 本調査区完掘状況

図版2



1 土坑SF01完掘状況（北西より）



2 土坑SF02完掘状況（東より）



3 土坑SF02覆土土層断面（東より）



4 土坑SF03完掘状況（北より）



5 土坑SF04完掘状況（北より）



6 土坑SF05完掘状況（南より）



7 土坑SF05・溝状遺構SD01土層断面（南西より）



8 土坑SF06完掘状況（東より）

図版3



1 土坑SF07完掘状況（北より）



2 土坑SF08完掘状況（北東より）



3 溝状遺構SD01完掘状況（南西より）



4 溝状遺構SD03完掘状況（南東より）



5 溝状遺構SD03土層断面（東より）



6 小穴SP01完掘状況（東より）

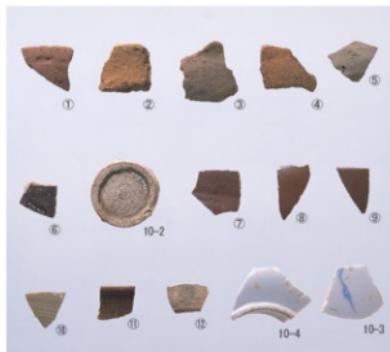


7 本調査区西壁土層断面①



8 本調査区西壁土層断面②

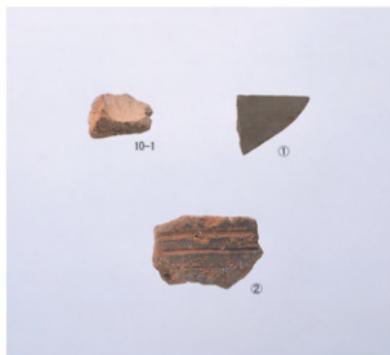
図版4



1 試掘確認調査出土土器・陶磁器（外面）



2 試掘確認調査出土土器・陶磁器（内面）



3 本調査出土土器・陶器



4 本調査出土の瓶



5 本調査出土の瓶（底部）

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第48集

立道遺跡

新東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

御殿場市－1

平成27年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹